ホウレンソウのべと病発生に注意しましょう

1　病原菌の生態、発生経路

　べと病の病原菌は、カビの一種です。生育適温は8～15℃で、比較的低温を好み、春と秋に発生が多くなります。湿度の高い条件で胞子が発芽し、葉の表皮（気孔等）から侵入して感染します。

春と秋	胞子の空気伝染 → 菌糸の侵入 → 感染 → 病斑の形成 → 胞子の形成 → 胞子の飛散 → 胞子の空気伝染
夏	胞子で夏越し
冬	植物体上に菌糸または胞子で越冬

2　管内での発生状況

　平成22年の春期は降雨・雪が多く、気温が低い時期があったことから、べと病の発生が多く見られました。

　当センターで調査したところ、レース1～7に対し抵抗性を有する品種でも見られました。このため、埼玉県農林総合研究センター、独立行政法人農研機構野菜茶業研究所へ調査を依頼したところ、「今後の詳細な調査が必要であるが、今回の菌は既知のレースとは病原性が異なるものと考えられる。」との報告がありました。

3　対　策

　抵抗性品種の利用だけでなく、次の対策を行いましょう。

①作付け前の土壌消毒
②ほ場の湿度対策
　明渠などの排水対策の実施　　雨よけトンネルやマルチの利用
　トンネル内の換気
③予防的な視点での薬剤散布
④収穫残渣の片付け

入間地域の主要な農産物であるホウレンソウの安定生産のため、べと病の発生に注意しましょう。
レース1～7に抵抗性の品種でべと病の発生が見られた場合は、当センターにお知らせください。